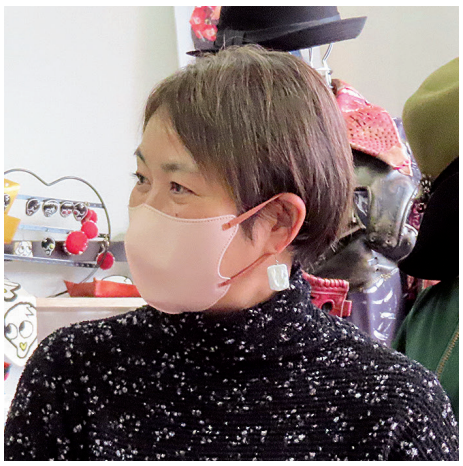
障がいのある人、平和、ハンセン病…ファッションを通じた問題提起の先駆者として



人権問題とは対極のイメージの強いファッションの世界。それを逆手にとって、より多くの人々に人権や平和といった社会問題へのアプローチのきっかけを投げかけ続ける――。東京コレクションをはじめ、多方面でファッションショーを展開するテンボデザイン事務所の鶴田能史さんにお話を伺いました。

（インタビュアー：藪本 雅子（やぶもと まさこ）：日本テレビアナウンサー、同報道局記者を経て現在フリーで活動）

藪本　鶴田さんは、２０１５（平成27）年に東京コレクション*1で障害のあるモデルを起用して注目されました。その後も、ハンセン病や広島、長崎の原爆をテーマに、メッセージ性の強い発信をされています。こうした活動はいつ頃からですか？

鶴田　テンボを立ち上げた時からですので、８年目です。専門学校の講師をしていたことがあって、ファッションショーの衣装をユニバーサルデザインで作りました。ランウェイには車いすの人に登場してもらいたかったのですが、学校は障害のある人をモデルとして起用することへのハードルが高く、結果、プロのモデルが障害者を演じました。変な話ですよね。

藪本　はい。なぜ、当事者が出られないのかがわからない。

鶴田　要は扱ったことがないので、どう対応したらいいかわからないということでしょう。次の年も隻腕（せきわん）のモデルの服を作ったのですが、やはり、プロのモデルの片方の腕を後ろで縛って作るしかなく、そこにいる限りは障害のある人と向き合えない。自分一人でや

鶴田　能史 さん
デザイナー・コシノヒロコ氏に師事した後、昭和学院短期大学講師、服飾専門学校の専任講師を歴任し、2015（平成27）年にテンボデザイン事務所を設立。ＢＩＧＢＯＳＳ新庄剛志監督やＳＵＧＩＺＯさん（ＬＵＮＡ ＳＥＡ／ＸＪＡＰＡＮ／ＴＨＥ ＬＡＳＴ ＲＯＣＫＳＴＡＲＳ）、元大関の小錦さん、はるな愛さん、サヘル・ローズさんなどの衣装を手掛ける。ファッション業界で培った経験を教育分野に還元し、未来ある子どもたちのための発信に力を注いでいる。

らないと何もできないと思って独立したのです。

●障害者モデル・平和・ハンセン病

藪本　なぜ、鶴田さんは障害者を起用することにこだわったのですか。

鶴田　理由はいろいろありますが、昔、自分の祖母が認知症で車いす生活をしていて、自分がデザインした服を着せようとしたところ、上着は簡単なんですけど、下がどうしても着せづらかった。だから、おしゃれで着せやすい服があればいいなと思ったのです。ビジネスとして独立する上で、需要がある分野は攻めていきたい。

もう一つ、そこに従事しているデザイナーがほとんどいないということです。お店づくりにしても社会はバリアだらけで、自分も意識していなかったのですが、ふたを開けてみると、こんなに偏っていたのかと気付いたのです。一度開けてしまうと、もう閉めるわけにはいかない。これは誰かが向き合わなきゃいけない、自分しかないだろうという使命感です。ファッションデザイナーと名乗るなら全ての人を対象にしなければ駄目だと思ったのです。誰かがやれば次に続きます。その轍（わだち）を残していけたらいいと思って率先してやっています。

藪本　東京コレクションでの障害者モデル起用は日本初ということで話題になりました。

鶴田　最先端の場所で障害の有無に関係なく分け隔てなくやれるということを、まず誰かが仕掛けないといけないと思っていました。賛否両論ありましたけどね。

藪本　正直なところ、私も最初は違和感がありました。

鶴田　何でファッションショーなのかと、誰もが思うと思います。でも洋服を作って売るだけじゃなくて、大切なことを社会に届けたいと思ったら、私の発信するツールはファッションショーしかないわけです。中途半端な覚悟でやっていません。

藪本　それは、これまでの活動を見れば伝わります。2回目のショーのテーマは「1945」、千羽鶴を使った衣装が印象的でした。

鶴田　戦後70年という節目だったので、平和に対するメッセージをファッションショーで発信したら世界中から反響があり、確かな手応えを感じました。そして、ずっと自分の中で悶々としていたハンセン病に対する偏見、差別、これがファッションショーで表現できるという確信に変わったんですよね。それで、1年間、多磨全生園（東京）に通ったのです。ちょうどその時、らい予防法が廃止されて20年の節目だったんですよ。

藪本　2016（平成28）年ですね。

鶴田　その年は何かが動いていました。映画の『あん』もすごくヒットした。宮崎駿監督が『ものの け姫』の中で実はハンセン病を描いたと、初めて公にしたのもこの年です。いろいろ重なったのです。ハンセン病は無知が一番怖いと思っています。だから、ファッションショーでは、まず知るための入り口を作りたいと思いました。その後、さらに向き合いたいという人、その日限りの打ち上げ花火で終わる人たちに分かれますが、それでいいと思うのです。

藪本　その時の衣装となった絵を描いたのは、以前アイユでも紹

＊1）東京コレクションの様子　https://www.tenbo.tokyo/fwt

介した田川誠さん*2ですね。色が本当に美しい。

鶴田　多磨全生園の豊かな緑の森を見た時に、田川さんの色覚が独特で、緑や青系の絵を得意とすることを知っていましたので、この世界、田川さんなら描いてくれるかもしれないと思い、お願いしました。

藪本　へその緒のついた胎児の絵があります。生きて産まれた赤ちゃんをホルマリン漬けにされた当事者から話を伺ってきましたので、複雑な気持ちにもなりました。

鶴田　これは「命の絆」というテーマで、何度も何度も描き直してもらいました。私が伝えたかったのは、ホルマリン漬けのかわいそうな子どもを伝えたいわけではなくて、どんな時代も赤ちゃんは生まれてくる時を幸せに待っていますということ。何で赤ちゃんのへその緒がこうなっているのか疑問に思う。これが知るきっかけ、入り口なのです。当然、この絵はハンセン病回復者の皆さんに見てもらいました。その人たちの傷痕をえぐることは絶対したくないですからね。悲しく暗い歴史があったのは事実です。でも、私が心がけているのは、隔離された生活の中にあっても、尊い人生を生きたという明の部分を表現することです。懸命に生きた1ページがあったということを見せたいからファッションで発信しているのです。

藪本　確かに、私も回復者の笑顔をたくさん見てきましたし、尊敬すべき素敵な人たちを知ってもらいたくて今までやってきています。昨年の東京都主催のヒューマンライツ・フェスタ*3では、回復者の藤崎陸安さんがモデルとして登場しました。輝いていましたね。

鶴田　藤崎さんの衣装は涙が表現されています。その絵をご覧になったときに「自分にもいろんな涙の種類があった。悲しいだけじゃなく、うれしい時もあったな」と感慨深くおっしゃったと聞いていたので、絶対にこの絵を使いたいと思っていました。

藪本　ハンセン病をテーマにしたのは今回が2度目、6年ぶりですが、前回との違いはどんな点でしょう。

鶴田　入所者の平均年齢は約88歳*4です。今、発信すべきものは、過去を掘り下げて辛かったね、ではなくて、その先です。参加してくれたモデルは、テンボのファッションショーでハンセン病を知っ

全ての作品は田川誠さん・深澤慎也さんの共作

田川さん「6年間、ハンセン病をテーマに絵を制作してきて、今回、30枚もの作品が衣装となって命を吹き込まれました。胸が熱くなる思いです。」

深澤さん「衣装がきれいだなあ、というところからその意味を知るきっかけになればいいですね」

https://www.tagawamakoto.com/

「命の絆」をテーマにした田川さん・深澤さんの絵をモチーフにしたドレス

藤崎さん「鶴田さんのハンセン病への向き合い方は素晴らしい。ショーを通じて、ハンセン病を知らない若者が、関心を持ってくれたら嬉しい」

＊2）本誌2019（平成31）年２月号・インタビュー

＊3）ファッションショー
https://youtu.be/T8fGpCEoixo　　トークショー　https://youtu.be/Iocj0GGx_dw

た方たちです。その方たちが何を感じたかをリアルにその場で伝える仕組みを作りました。モデル一人一人が人権について思うことを自己PRとしてパンフレットに掲載し、ショーの当日MCが一人一人のテキストを全部読み上げました。当日の動画には、ハンセン病について思うことも付け加えています。ハンセン病を入り口に、人権を考え、自分らしくあることができるという発信につながる。次のステップまで誘うことができるストーリーになったと思っています。

●ティコとヨミちゃん

藪本　テンボはSDGsを意識した服作りもしていますね。

鶴田　新庄剛志監督（北海道日本ハムファイターズ）の衣装は全部大切にされ続けたグローブだけで作っています。ほかに、ネクタイとかブラジャーとか着物とか、いろいろな物を集めて新しい服を作ることは今までずっとやってきています。無印良品とのコラボで、リサイクル衣装から新しい服を作るという提案もしています。例えばこれは、古着30着、一切切り込みもはさみも入れずに縫ってつなぎ留めています。だから、縫い目をほどいたら、また復活できるんです。SDGsという言葉が出てきましたが、ハンセン病の歴史をひもといてもそうなんですけど、昔の人たちは、療養所で服が着れなくなったりすると、包帯や雑巾にしていました。着物だって、人に譲って、譲って、最後まで使い切る。当たり前のことです。

新庄剛志監督の
ユーズドグローブ衣装

無印良品コラボドレス
（30着のリサイクル衣料を使用）

藪本　日本のもったいない精神ですね。どこまで世界を広げていくのか、テンボの展望をおきかせください。

鶴田　今年に入って、障害のある未成年の自立支援応援プロジェクトブランド「ティコ」を立ち上げました。ご存じのとおり、障害のある人たちの作業所の平均賃金は本当に少なくて、時給２００円ぐらいです。それでは、全然生きていけないわけです。福祉が何とかするのを待つより、自分でやろうと思いました。まず、障害のある人たちに絵を描いてもらって、それを鶴田がデザインして販売する。その売上をアーティストと折半します。一番楽なところは、参加者は何の負担もないんです。早速、地元の木更津市立木更津第二中学校特別支援学級に協力してもらって、半日授業をして完結しました。それだけです。消し判、スタンプ、切り絵、指で絵の具をぽちぽちと押

ティコ

https://www.tycho.tokyo/

＊4）平均年齢は87.6歳、入所者数は899名。（2022（令和４）年７月末日現在）

す。絵のうまい下手は関係ない。それらをファッションデザインに置き換えます。そこはプロが必ず手を加えます。

藪本　どんな風に仕上がるのか、何だかワクワクしますね。

鶴田　売れたらそのアーティストにお金が入りますので、お小遣いには絶対なると思いますよ。ファンがついたらすごいですよ。それこそ自立につながる、支援につながるんですよ。

藪本　自分の絵も使ってほしいという人、全国にいるでしょうね。

鶴田　でも、デザイナーは僕1人なので、やりたい人が増えれば増えるほどパンクしちゃいます。だから、デザイナー雇用、デザイナー育成も視野に広げていきたい。その中には障害当事者も入り込めるかもしれない。私はテンボを立ち上げた時から、全部、教育にシフトしていきたいと公言しています。テンボでやってきたことは、人を育てることに等しいと思っています。平和に対する事業も、障害のある人たちと分け隔てなく向き合う方法も、まず人を知ることだと思っています。人を知った上でものを作るということは、全てに通底する。ティコというブランドはその学校作りの第一歩です。世の中をつくっていくのは、未来ある子どもたち、若者なので、その人たちを育むための仕組みを作りたい。

藪本　ティコという名前の由来は？

鶴田　月の一番大きいクレーターの名前が「ティコ」といいます。月はうさぎにも見える。だから、うさぎのキャラクターに、体が月の形。出てくるキャラクターは全部本当に月にある名前です。スミス海はスミス、リッチオリからリッチ博士。ここからテンボのキャラクターのドクロマークのヨミちゃんの世界に行けるというストーリーです。

藪本　ヨミちゃんは、何でドクロなんですか。

鶴田　ドクロは死の象徴です。黄泉（よみ）の国。メメント・モリ（＝ラテン語で「死を想え」）という言葉があって、それがテンボブランドの根幹にあります。障害のある人、病気の人と、様々な人たちと向き合う上で、死は隣り合わせです。今まで何人も見送り、その度に、悲しんで、ぼろぼろになりました。ドクロマークは、死を忘れず、その上でどう生きるかという一つの問題提起であり、覚悟です。死から逃げずに向き合うために、死の象徴でもあるドクロを掲げているのです。自分は先駆者というポジションです。誰もやらない分野を開拓することが自分の担う役割だと思っているので、今死んでもいいぐらいの覚悟で生きていきたいし、今を楽しみたいのです。

tenbo

●tenbo
https://www.tenbo.tokyo/

✽後記　何年も啓発活動を続けてきましたが、手詰まり感がありました。思いがけない方向からのアプローチ、枠にとらわれない自由な価値観が偏見や差別の突破口になるのだと思いました。